
遊戯王GX 早乙女家に転生

北風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 早乙女家に転生

【Nコード】

N4897BA

【作者名】

北風

【あらすじ】

前世で病死した俺は、気が付いたら転生していた。しかも、原作キャラ早乙女レイの兄に。まあ、せっかく病氣から開放されたんだ、思いっきり楽しもうじゃないか。

え…？ 俺歩けないの…？

（プレイミスが凄まじく多いと思います。それでも読めるという方はどうぞ）

プロローグ（前書き）

初投稿です

プレイミスが凄まじく多いと思いますが、どうぞ
よろしくお願いします

プロローグ

視点：？？？

突然だが俺は転生した

あまりにも唐突で荒唐無稽で支離滅裂な宣言を許してくれ

だが、事実だから仕方が無い

誰かを庇おうとしてトラックに轢かれたわけでもなく、
通り魔に惨殺されたわけでもない

ただ普通に病気で死んで、普通に惜しみながら死んださ

特別なハプニングでも無いし、摩訶不思議なアブノーマルも
関係なく、本当に普通に若く死んでいつてしまった

元々生前は病気で蝕まれ、まったく人生を楽しまなかった俺に未練
なんて無い

そんな俺だったが、実は転生した

なぜ分かるかって？

ならこの会話を聞いてみてくれ

「おめでとunggございます！ 元気な男の子ですよ！」

少し低い俺の視線の前ではそんなことが言われていた

目の前には数人の白衣の人間と、覚えているからに高校生だった俺を腕の中で抱いている女性が居た

そして、その横には涙を流しながら笑顔を見せる男性

「良く頑張ったな！」

男性は俺を抱いている女性に向かってそう言った

「名前は？」

「この子の名前はセイ。早乙女セイよ……」

出産後で息切れにも関わらず、女性はそう告げた

どうやらそれは俺のことらしい

思考が追いついた俺は、自分が新たに命を貰ったという結論にたどり着いた

つまり、これが俺の新しい名前で、この人たちが俺の新しい両親と
いうことになる

早乙女セイ、か

何気に俺は好きな名前だ

それにしても、生まれたての赤子の所為なのか、頭の

中では意識があるのにも関わらず実際は大声を出して泣いている

それが健康の証なんだろうけど、俺としてはかなり恥ずかしい

高校生にもなって大声で泣くことになるとは…

ふああ……

赤子の所為なのか、凄まじく眠くなって来た

俺はそのまま抵抗することなく睡魔に負け、意識を
深い底へと落とした

皆さんこんにちは

早乙女セイ、ただいま二歳です

あれから意識を失ったかと思ったら、次に気が付けば俺は
そこまで成長していた

どうやら自我があつたのは生まれたあの時だけであって、
やはり幼い赤子の時は意識が完全に無くなっていた

現在は二歳ということもあって少なからず喋るようになり、
母乳も飲まず離乳食を食べられるようになった

まあ、離乳食以前の意識が無くてよかった

高校生になってまであんなことをするのは正直気が引ける

「セイ、これからお出掛けしましょうね」

車に乗り込みながら、母さんは俺にそう言ってくれた

そのまま後ろの席に俺を座らせると、
助手席へと座り込み、父さんが運転席へ座った

どうやら今日はどこかへ出掛けるらしい

「はあ……本当に大丈夫かしら……」

深い溜め息を吐くと、母さんはそう呟いた

「安心しろ。直ぐに治るさ」

意味不明な言葉を父さんが言うと、車は無造作に発進した

俺達がたどり着いたのは、大きな建物

周りには白い軽自動車のような車がいくつも並べられ、
屋根には赤いランプのような機会が取り付けられている

そう、ここは病院だ

何故こんな所に来るんだ？

定期健診はまだ受けているが、今日はその日じゃないはずだ
混乱する俺を他所に、両親は病院の中へと入っていった

「貴方のお子様は一生自力では歩けないでしょう」

……へ？

「右足の筋肉が他と比べ極端に弱くなっており、また
左足にも右足ほどではありませんが同じ状態になっています。
おそらく補助無しで歩くことは不可能でしょう」

医者は延々とそう告げた

……嘘だろ？

前世では病気、こっちでは両足が不自由

なんで俺ばかり……！

二歳でありながら、俺は心の中で叫んだ

それからというものの、大変な数年間だった

補助無しではあるけないことから基本は車椅子になってしまい、
一人じゃ着替えることもトイレに行くことも出来ない

外にも出れず、同年代の子供とも遊べない

幼稚園や小学校なんて論外、俺は一度も学校へ行っていなかった

今は両親が俺に勉強を教えてくれるが、もう少し年月さえ経てば杖が使えるようになるから一人で学校に行けるそうだ

はたしてそれがいつになることやら……

そんな俺の二度目の人生にも転機が訪れた

「レイ〜！」

横では母さんが赤ん坊を腕に抱きながら笑っている

それに反応したようにキャッキヤと赤ん坊は笑っていた

そう、俺に妹が出来たんだ

名前は早乙女^{さふとめ}レイ

俺が六歳の時に生まれた子供で、今回は俺と違ってなんの支障も障害も無く健康に生まれた普通の子供だ

はつきり言って、最初は嫉妬した

少しずつ動けるようになっていったレイを見ていて、俺は堪らなく羨ましかった

自分もあんな風に動き回りたい、と

だが、そんな考えは直ぐに吹き飛んだ

また年月が経ち、俺は十二歳、レイは六歳になった

「お兄ちゃん！」

俺の後ろをレイは慌しく着いてくる

両足以外は順調に成長し、全体的に筋肉が付いてきたため俺はやつと車椅子から卒業し、杖を使って自分で行動できるようになった

それでもまだ危なっかしいのは変わらないが、俺は自分で動けることが感動的だった

今まで一度も一人で外へ出たことの無い俺にとってはこの上無い幸せと嬉しさだった

「なんだレイ？ そんなに慌てるとこけるぞ？」

俺以上に危なっかしく走ってくるレイを注意すると、溜め息を吐きながら俺は止まった

「俺もお前ももう直ぐ学校なんだから、ちゃんとしっかりしないと危ないだろ」

それでも、やっぱり弟や妹というものは可愛く感じるもんだ

ブラコンやシスコンとかそういうのじゃなくて、ただ
純粹に良いなあって思ってるんだよ

「うん！ ボクもお兄ちゃんももう直ぐ学校だね！」

笑顔でそう返してきた

「自立しろよ？ もう一緒に居てあげられないんだから」

「分かってるって！」

はあ、本当に分かっているんだろうか……

無邪気にそう返すレイに、俺はさらに深い溜め息を吐いた

まあ、歳の割にはかなりしっかりしてるから、
俺が学校に行ってもやっていけるだろうし

「セイー！ レイー！ もう帰ってきてー！」

家の中から母さんが呼んでいる

それに俺は短く答えると、そのまま家へ向かって歩き出す

「あ、待ってよお兄ちゃん！」

レイは慌しくその後を着いてきた

プロローグ（後書き）

主人公の杖はとある魔術の禁書目録のアクセラレータ一方通行の杖を想像してください

なお、この作品では主人公は足が不自由ですが、もし

実際にそのような状態の方を不愉快にさせてしまったらすみません

一話（前書き）

シンクロやエクシーズはリクエストがあったら使用するつもりです

プレイミスなどをお願いします

一話

視点： 早乙女セイ

「お兄ちゃん決闘しよー！」
デュエル

唐突にレイがそう告げてきた

デュエル、正確に言うとデュエルモンスターズだ

カードゲームの一種で、世界的に絶大な人気と支持を誇っている
最早遊びというより協議の領域に達していた

世界はこのデュエルモンスターズで回っていてもおかしくない

そんな絶大な人気のカードゲームだが、俺の前世では
これほどの人気や影響力は無かったはずだ

元々は漫画やアニメから実際に商品化されたもので、
人気はあったもののこれほどではなかった

結論を述べよう、ここはそのアニメ、遊戯王の世界だ

俺がガキの頃よく見ていて遊んでいたアニメで、
かなり好きだった故に内容は未だに覚えている

はつきりとは覚えてはいないが、それでも大体の内容は分かる

そして俺の妹、早乙女レイは間違いなくその中の主要キャラの一人だった

そこまで覚えているわけじゃないが、確かそうだったはずだ

まあ、そこまで覚えているわけではないから、
そこまで気にしてはいないがな

というより、今の俺には関係ない

今現在進行形で俺の家族なんだし、両親だって俺を生み育ててくれた張本人なんだ

前世なんか関係ない、ここがもう俺の世界なんだ

期待を込めた目で俺を見ているレイに少し
笑い声を漏らすと、軽く了承した

「デッキとディスクを取ってくるから、少し待っててくれ」

杖を持ち、座っていた椅子から起き上がると俺は

そのまま立ち上がり、引き出しの中からデッキを取り出した

そして、机に置いてあるディスクをとった

「外に行くか」

母さんに少し外へ出ると伝え、俺はレイと共に部屋から出た
学校にこそ行っているが、俺に友達は居ない

全員が俺のこの状態を見て、なにかと鬱陶しい気の毒な視線を送ってくるから誰とも仲良くなれていない

レイと違って俺はあまりお人好しじゃないからな

故にこういう休日にはあまり外には出ない

だからなのか、母さんは少し嬉しそうに了解してくれた

「行くよーお兄ちゃん！ 今度こそお兄ちゃんに勝つ！」

「ハハ……俺もまだ負けてられないよ」

やる気満々で距離を取りながら我が妹はそう告げてきた

年齢の割にはかなり実力は高く、中学一年生の俺とも互角に戦えるほどセンスが高かった

それでも詰め甘いことが多いからなのか、まだ俺には一度も勝っていない

まあ、俺としてはこちらが負けてもあまり悔しくはないんだけどな
どちらかと言うと俺を超えてくれる日が待ち遠しくて堪らない

「^{デュエル}決闘！ー！ー」

デュエルディスクを展開し、俺とレイは身構えた

早乙女セイ / 4000

vs

早乙女レイ / 4000

「先攻はじゃあ俺が貰おうか。俺のターン、ドロ」

手札を確認する

……まあそこそ良いな

可もなく不可もなく、いたって平凡だ

まあ、チートドロの無い俺にとってはこれが限度だろう

「魔法カード『愚かな埋葬』を発動。デッキからモンスターを一体墓地へ送ることが出来る。俺は『ダークブレイズドラゴン』を墓地に送る」

デッキから最上級モンスターを墓地に送る

このカードは生前では制限カードになっていたのに、何故かこちらでは

無制限だったから三枚積みになっている

墓地の重要さがわからないこの世界ならではの解釈だな

「げっ、お兄ちゃん初っ端からそれ使った……」

何度がデュエルしている所為なのか、レイは墓地の重要さを分かっている

「さらに、『ドル・ドラ』を攻撃表示で召喚。カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「うーん、リバーiscardが怖いなあ……ボクのターン、ドロー！
少し警戒しながらも、レイはカードをドローした

「手札から『ライドニンクギア光神機 桜花』を妥協召喚！」

攻撃力2400の大型モンスターがレイの場に出された

俺と違って引き運がそれなりにあるからなのか、
一ターン目からこんな芸当が出来るらしい

はあ、羨ましい……

「このカードは生贄無しでも召喚できる！ でもエンドフェイズに
墓地に送られちゃうけど。バトル！ 桜花でドル・ドラに攻撃！」

あの巨体が奇妙な姿をした俺のモンスターに襲い掛かった

「これは俺もくらってられないな。畏カード『ガード・ブロック』
を発動。

戦闘ダメージ計算時、ダメージを0にすることが出来る」

ドル・ドラは破壊されたが、俺のライフに支障はなかった

これは結構優秀な防御カードなため、当然多用している

「そして発動後、俺はカードを一枚ドロ―できる」

「ありや、やっぱり防がれちゃった。でも『次元幽閉』とかじゃなかったから

マシかな？　ボクは速攻魔法『月の書』を発動！　桜花を選択して、裏側守備表示にする！

これでもう自爆効果は発動しない！　ボクはカードを二枚伏せてターンエンド！」

「エンドフェイズ時、『ドル・ドラ』の効果を発動。このカードが破壊されたターンのエンドフェイズ、攻守を1000にして再び特殊召喚する事が出来る」

再び墓地からドル・ドラが戻ってきた

このカードは他の優秀なカードに劣りはするけど、個人的に気に入っているから使っている

それに、リクルーターにも対応できるからな

「生贄要因が一体、怖いなあ……」

「ハハ、上級モンスターを引けたらな。俺のターン、ドロ―」

引いたカードを見て、俺は苦笑いを浮かべた

凶悪なカードを引いたんだ、こんな表情になるのは当たり前だろ？

「魔法カード『苦渋の選択』を発動。デッキから五枚のカードを選択し、相手に見せる。相手はそこから一枚選択し、俺は手札に加え、

残りのカードは全て墓地へ送る。俺が選ぶカードは、これだ」

ミンゲイドラゴン

フェルグラントドラゴン

ボマー・ドラゴン

ダークブレイズドラゴン

ダークブレイズドラゴン

ちなみにこのデッキには『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』は
残念ながら入っていない

というより持っていないと言ったほうが正しいか

前世と違いこちらの世界では幻の超レアカードであり、
善良なる一般市民の俺が手に入れられるはずがない

ネットでも数百万の単位で取引されている、元祖レッドアイズより
高価格な馬鹿げた値段だ

効果が優秀なのが敵となったか

「あわわ、どれも墓地に送りたくないカードばかりだ……」

俺の選んだカードを見てレイは慌てている

まあ、どれも墓地に送ったらプラスにしかないからな

ボマー・ドラゴンは手札に行けば色々と面倒なことになり、
ミンゲイドラゴンは墓地に行くともっとヤバイ

ダークブレイズドラゴンは手札に来たらあまり役に立たないが、
地獄の暴走召喚などで墓地から特殊召喚されたら堪ったもんじゃないな
いしな

あはは、大人気ないのは自覚しているさ

「うう……じゃあ『フェルグラントドラゴン』を選ぶよ」

「オツケー、『フェルグラントドラゴン』を手札に加えよう」

現在一番手札に必要なカードが渡ってきた

だが、これがレイにとって吉と出るか、凶と出るか

答えは……

「魔法カード『太陽の書』を発動。お前の桜花を表側表示にする」

「あ……」

カードの裏側に隠れていた桜花が姿を現した

それを見た俺はニヤリと口元を吊り上げた

「もう一枚の伏せカード『リビングデッドの呼び声』を発動！
墓地から『ダークブレイズドラゴン』を復活させる！」

それを見たレイは青ざめた表情になった

どうやら俺がいつもやっている戦術に気付いたみたいだ

「速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！ 攻撃力1500以下の
モンスターが特殊召喚に成功した時、同名モンスターをデッキ、手
札、

墓地から全て特殊召喚する！ 俺は現在攻撃力が1200の
『ダークブレイズドラゴン』を選択！」

コレが俺のお気に入りのコンボだ

なんというか、決まるとかなり気持ち良い

「レイも桜花を可能な限り召喚できるが、するか？」

「ボクのデッキに桜花は一枚しかないよ……」

「なら続行しよう。さらに、『ダークブレイズドラゴン』の
特殊効果を発動！ このカードが墓地から特殊召喚された時、
元々の攻撃力と守備力が倍になる！ よって攻撃力は2400だ！」

最上級モンスターにしては少ないが、それでも三体も並んでいるんだ

今のレイにはかなりヤバイ状況だろう

「最後だ！ 『ドル・ドラ』を生贄に『ストロング・ウィンド・ドラゴン』を

攻撃表示で召喚！ このカードはドラゴン族モンスターで召喚した時、その生贄

にしたモンスターの攻撃力の半分を自身の攻撃力に加える！ よつて攻撃力は

500ポイントアップし、2900だ！」

これで俺の場を見てみよう

攻撃力2400のダークブレイズドラゴンが三体、そして貫通効果を持っている攻撃力2900のストロング・ウィンド・ドラゴン

数多くの巨大なドラゴンが立ち並び、レイの顔はなんともいえない表情になっていた

「お…お兄ちゃんの鬼ー！」

「バトル！ ストロング・ウィンド・ドラゴンで桜花に攻撃！」

「あわわわ、カウンター罠『攻撃の無力化』を発動！ 相手の攻撃を無効にして、

バトルフェイズを終了させる！」

「ちッ、ターンエンドだ」

伏せカード0か

これは少し拙いかもな

「お、お兄ちゃん手加減無さ過ぎだよ！ ボクのターン、ドロ―
！ 来た！

手札から永続魔法『神の居城 ヴァルハラ』を発動！自分の場にモ
ンスターが
存在しない時、手札から天使族モンスターを特殊召喚する！」

来た、レイのキーカード

俺と一緒に作ったからなのか、俺はレイのデッキは大半を把握して
いる

まあそれでも俺の知らない内に改良しているから
卑怯とかじゃないけどな

そして、このレイの天使族デッキのキーカードがヴァルハラだ

「ボクは手札から『The splended VENUS』を
特殊召喚！

このカードがフィールドに存在する時、天使族以外のモンスターの
攻撃力と守備力は500ポイントダウンする！」

「ちッ…」

俺のデッキとは相性が最悪なカードだ

この今現在俺が使っているデッキは元々はお店で売っていたデッ

キを

改造して作ったデッキなんだ

『一族の結束』にも対応できるようにドラゴン族で統一している
所為か、

こういう属性弱体化デッキには滅法弱い

妹の癖に嫌味なカードを使いやがる

「まだボクは通常召喚していない！ 『勝利の導き手フレイヤ』を
通常召喚！ このカードが表側表示で存在する時、ボクの天使族モ
ンスターは
攻撃力が400ポイントアップする！ これでVENUSの攻撃力
は3200！」

うわぁ、半端ないな

さすがはレイだな、俺が教えた甲斐がある

まあ、少し強くし過ぎたと度々思うが

「バトル！ VENUSでストロング・ウィンド・ドラゴンに攻撃
！」

VENUSから放たれた閃光により、呆気なく破壊されてしまった
強化されたストロング・ウィンドが破壊されたのは痛いぞ！

「ターンエンド。知ってると思うけど一応言うよ？ 場に他の
天使族が存在する限り、フレイヤを攻撃対象に出来ないから」

「分かってるって。俺のターン、ドロー！」

引いたカードを見て、俺は少し微妙な気分になった

今更これが来るのかよ……鬱だ……

「はぁ……ダークブレイズドラゴン二体を生贄に、
『フェルグラントドラゴン』を攻撃表示で召喚。カードを
一枚伏せてターンエンドだ」

「あと少しでお兄ちゃんに勝てる！ ボクのターン、ドロー！」

力強くカードを引いたが、欲しいカードが来なかったのか
嫌な表情をした後、再びこちらへ向きなおした

「VENUSでフェルグラントドラゴンに攻撃！」

ククク、甘えよ！

「罨カード発動！ 『バーストプレス』！」

「……え？」

「自分フィールドのドラゴン族モンスターを生贄にし、そのモン
スターの攻撃力以下の
守備力を持つモンスターを全て破壊する！ 俺が選ぶのは当然『フ
エルグラントドラゴン』だ！」

フェルグラントドラゴンが上空へ飛び上がり、その口から

炎を放出させた

それは瞬く間にこの場を焼き尽くし、VENUS以外のモンスターを全て破壊した

これで邪魔なフレイヤを破壊できた

「えっと……じゃあVENUSでダイレクトアタックするね？」

早乙女セイノ 1200

一気に俺のライフは削られた

「なにやってるのお兄ちゃん？ そんなことしなくても別に『フェルグラントドラゴン』を破壊させたら良かったのに……」

「知らん！ 俺は自分のやり方でやる！」

というより、フレイヤは守備力も上げるということを忘れていただけなんだがな

それを途中で気付いたんだが、今更変えられるわけがなく、自棄になって使った

あはは、要略するとパニックになっているだけなんだ

「横暴な……ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

今、俺の場には役目を失った『リビングデッドの呼び声』のみだ
ちよつとやべえかもな

お、良いカードを引いた

だが、それは表情に出さず、ポーカーフェイスを貫き通した

「『デコイドラゴン』を攻撃表示で召喚！ ターンエンドだ」

「デコイドラゴン？ 見たことのないカードだね。ボクのターン、
ドロー！」

レイは俺が新しく入れたカードに見覚えが無いのか、首を傾げた

まあ、これは俺が最近自腹で買ったカードだからな、
今日入れたばかりなんだよ

「『シャインエンジェル』を攻撃表示で召喚。バトル！
VENUSでデコイドラゴンに攻撃！」

「掛かったな！ デコイドラゴンの効果発動！ このカードが攻
撃対象にされた時、
墓地からレベル7以上のドラゴン族モンスターを一体特殊召喚し、
そのモンスターと
戦闘を行わせる！ 俺は墓地から『フェルグランツドラゴン』を召
喚！」

「ッ……！ それでも攻撃を続行する！ 攻撃力は500ポイント
下がつて

2300だからボクの勝ちだ！」

「甘えよ！ フェルグラントドラゴンの効果発動！ このカードがフィールドから墓地へ送られ、再びフィールドに特殊召喚された時、墓地からド族モンスターを一体選択する！」

このカードは選択したモンスターのレベル×200ポイント攻撃力がアップする！

俺はダークブレイズドラゴンを選択！」

つまり、フェルグラントドラゴンの攻撃力は――

「攻撃力3700!？」

「迎撃しろ、フェルグラントドラゴン！」

フェルグラントドラゴンのブレスがVENUSを焼き尽くした

早乙女レイノ 3100

「うう……ボクはカードを一枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

俺はドローしたカードを見て、微笑んだ

「悪いなレイ、俺の勝ちみたいだ」

「え？」

「永続魔法、『一族の結束』を発動！ 自分の墓地に存在するモンスターの種族が一種類のみの時、その種族のモンスターは攻撃力が800ポイントアップする！」

当然、俺の墓地にはドラゴン族が一体のみだ

つまり、VENUSが破壊された今、攻撃力も元通りになっている

「フェルグラントドラゴンの攻撃力は4200だ！」

「幾らなんでも高すぎるよ！」

それにしても、レイが1ターン目から伏せていたカードが気になるな

まあ、今更警戒しても無駄だな

攻撃力4000越えを前にして、レイは少し表情が青ざめていた

「終わりだレイ！ 『フェルグラントドラゴン』で『シャインエンジェル』に攻撃だ！」

「お兄ちゃんの馬鹿ー！」

早乙女レイ / 0

デュエルが終了し、ソリッドビジョンが消えていった

最後に俺に恨みの言葉を残していったレイへと駆け寄ると、少し涙目になりながら俺を睨んでいた

まあ、ガキににらまれても可愛いとしか思わないがな

「悪いなレイ、大人気なかったか？」

「うっん、それもお兄ちゃんだしね」

それにしても、楽しいデュエルだったな

久しぶりに俺のテンションもかなり向上した

「それにしても、最後のカードはなんだったんだ？」

「ただのブラフカード。なんか今日は調子が悪かったよ」

あの引き運で調子が悪いって、全力の時はどれぐらいなんだよ？

「おっとっと……」

久しぶりにハイテンションで居た所為か、少しフラフラしてしまう

慌ててレイが支えてくれ、倒れずには済んだ

ちなみに決闘する時は起用に杖にもたれながらカードをプレイしている

長い間ずっとやっているうちに自然に身についたスキルだ

「お兄ちゃん大丈夫？」

「大丈夫だ、少しフラフラしただけさ。それより、帰るか。お前のデッキもまた確認したいしな」

「うん！」

俺はディスクの電源を切ると、杖をちゃんと持ち、そのまま帰路へとついた

その横をレイが着いてくる

こういう一日があるたびに俺は思っんだ

転生してよかったって

一話（後書き）

レイのデッキは作者の妄想で天使族デッキになりました

まだ誰にも恋をしていないので恋する乙女デッキではありませんが、原作通り原作開始時にはそのデッキを使わせるつもりです

そして、これがこの小説の主人公のデッキです

改造ストラクチャーデッキ

次回もよろしく願いします

あれ？ ミンゲイドラゴンを使っていない…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4897ba/>

遊戯王GX 早乙女家に転生

2012年1月13日16時57分発行